
とある妖精の未元物質

ラック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある妖精の未元物質

【Nコード】

N4443Y

【作者名】

ラック

【あらすじ】

これは「もう一人の未元物質」より現れた新たな主人公、零崎リオとFate/EXTRAのキャスターが原作に介入！という力オスな物語

プロローグ

俺は零崎リオ、先ほどまで学園都市という町にいたはずの人間だ

俺にも良くわからないんだが、どうやら別の世界へと飛ばされてしまったらしい。まず、町並みが違いすぎる、とてもじゃないが科学が発展しているとは言えない町だ

どうしたもんか・・・俺は周りの町の人に聞いて回ったところ、この町の名はマグノリア。妖精の尻尾つつーデカいギルドのある町らしい。これだけの情報でもここが俺のいた世界ではないのだと気づくはずだ

何にせよ、来たのなら多少なりとも馴染むしかない。郷に入りては郷に従えって奴だな・・・

俺は妖精の尻尾というギルドへ向けて歩きだした

異世界

「おいおい、勘弁してくれ・・・」

俺、零崎リオは学園都市に住む超能力者だったはずだ。それが今は見知らぬ場所での迷子になった超能力者である

ただでさえ、疲れが溜まっていたというのにこの仕打ちだ。ぶっ倒れたくなるのを堪え俺は辺の探索を開始する。見た感じはただの森のようだ

「あ、能力使ったら良かったんじゃないか」

俺はそうすると背中から6枚の藍色の翼を出す。ちなみに学園都市第二位の垣根帝督は真っ白の翼だ。能力は同じなのに何故か翼の色が違う。それに垣根は天使っぽいのに俺の場合は悪魔のような翼だ見た目でも劣ってるなんて最悪以外のなんでもないな

俺は翼で空へと上がり、あたりを見渡す

すると、すぐ近くに町があるのが見えた。とりあえずはそこに行くしかないのだろう

俺はその中でも目立って見える建物へと最高速度で飛んでいった。名前はフェアリーテイル・・・つまり、妖精の尻尾、ということだろうか

名前的に俺は宿屋を想像していたのだが、中に入ると雰囲気は真逆、どちらかというと酒場のそれに近い・・・いや、訂正しよう。近い

のではなく酒場なのだ

「あら？もしかして、新人さん？」

中から白い髪の女性に話かけられた、新人・・・というわけでも無いので、とりあえず違う、と答えておいた。それからここがどこなのか聞いてみたところ

町の名前はマグノリア、そしてここは酒場ではなく妖精の尻尾という魔導士とやらのギルドらしい

一番引つかかるのは魔導士、つまりコイツらは魔法を使うということだろうか？科学の発展している俺の町では信じられないことだ

「一ついいですか？魔導士ということは、つまり魔法を使うということですよ？」

そう尋ねると返ってきた言葉は予想通りのもだった

それにしても困った・・・どうやら俺は本当に変な世界へと迷い込んでしまったらしい

「なんじゃお前さん、旅人か？」

そう俺に話しかけてきたのは信じられないほどに小さいおじいさんだった。いつまでも情報が不足しすぎたままだと面倒なので俺は自分の身にあったことを全て話すことにした

「なんと・・・！！お前さんは異世界の住人ということか！」

周りの連中もいつの間にか静かになり、こちらの話聞いている

「どうやら、そのようです。俺達の世界では魔法というものをここまで使えるものはいない・・・いや、俺が知る限りでは一人もいません」

その言葉を聞いて皆戸惑っているようだ

「ですが、俺達には超能力つてもんがあります」

「ほう、超能力？見せてもらってもいいかの」

俺は翼を出現させず、微量の末元物質を小さい椅子にかかる重力に混ぜ異質なものと変えることで椅子は踏み潰されるように潰れてしまった

「凄いの・・・まったく魔力を感じなかった・・・」

「これで信じてもらえたでしょうか？」

ふむ、と考え込むように小さい老人マカロフが唸っている

「よし！お前さん、うちのギルドに来んか？」

さっきまで唸っていたマカロフからの突然の提案

「なるほど・・・今の俺には職も金も住むところも無い。そっちなほうが都合がいいかな・・・その話乗ったぜじいさん」

「じゃあ、ギルドの紋章を押すのだけれどどこがいいかしら?」

白い髪の女性の名はミラジェーン、ミラと呼ばれているらしい。ミラはハンコのようなものを持っている、恐らくそれがギルドの紋章とやらを付ける際に使用する道具なのだろう

「じゃあ、右腕に頼む」

「はい、これで貴方も妖精の尻尾の一員よ」

俺の右腕には藍色の紋章がある、それにしても能力者が魔導士ギルドなんて何だか笑えてくるな

「それじゃあ、歓迎パーティーといこうぜ!」

「リオ!!妖精の尻尾へようこそ!!」

色々な人達に歓迎され、俺は異世界での生活をスタートさせるのであった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4443y/>

とある妖精の未元物質

2011年11月17日20時03分発行